

講演録特集

20世紀の点検と21世紀への展望

大学生と語る

(財)世界平和研究所会長・元内閣総理大臣

中 曾 根 康 弘

(拍手)

ご紹介を頂きました中曾根でございます。

本日は郷里の皆様方を始め、学生の皆さんや先生方にお話をする機会を頂き、大変光栄に思い、また嬉しく思っている次第であります。私は高崎の皆さんのお陰で、中央で働かせて頂いているため、常に、高崎に御恩返しをしなくてはいけないと思っています。政治の面では、新幹線や道路をどうするとか、いろいろ行っていますが、学問や文化の面で御恩返ししたということは過去にあまりないので、今日は、その一端を果たすことができることを非常に嬉しく思っています。こういう機会をもし皆さんが喜んでくださり、御恩返しの機会を頂けるのでしたら、時々お邪魔をさせていただきたいと思います。ただ私の話がつまらなければ、その時は、「ノー」と言ってピーター(拒否権)を使って下さって結構だろうと思います。

県民性の反省

私は、昭和22年(1947年)に衆議院議員に初当選させて頂きましたが、当時、警視庁の監察官をやっていたため、私の名前は群馬県の人に殆ど知られていなかったのです。そこで、『県民性の反省』という一文を「上毛新聞」に投稿しました。その中で私は、まず上州の特色は、雷、空っ風、火山灰、かかあ天下の4Kであると述べました。雷と空っ風は人間を鋭角的にする。だから国定忠治みたいのが生まれる。また火山灰では米や麦の栽培よりも養蚕の方が適しているのでお蚕が盛んになる。そして、お蚕の作業の中心は女性になるため、自然と奥さんが実権と財布を握り、俗に言う“かかあ天下”になると思うのです。つまり、上州とは、そういう風土的影響が非常に多い土地柄なのです。

次に、江戸幕府は上州が江戸近郊でありながら、雄藩を置かなかつた。高崎藩でも、たしか四万石か五万石ぐらいでした。というのは、幕府は新田義貞が鎌倉幕府を落とした先例から大きな強い藩を置くのではなくて、小さな藩をたくさん置き、その間に徳川直轄の天領を数多く置いたのです。例えば、岩鼻のように殿様ではなくて代官様がいる天領をたくさん置いて分割統治をし、江戸を守っていた。そういう体制でありますから、悪代官が悪いことをずいぶんして苛斂誅求かれんちゆうきゅうをしていた。

そこで、私はこれからこの県でやらなくてはならないことは、県民性と教育を直すこと、そして青年を育成することであると書いて、中曽根という名前を売ったわけで有ります。それが端緒で青雲塾というものを作り、青年運動を群馬県中に広めました。

そして、その後『青年の理想』という本を書き、それが紙のない当でも43,000部売れたのであります。その中で私は、戦争に負けて天皇制が否定されて、一切の価値が埋没された、その時に、我々は、何を受け継ぎ、何を捨て、何を目指して進むべきかということ『青年の理想』というタイトルで、自分の貧しい知識で書いたのであります。また私の大学時代の恩師である矢部貞治先生が序文を書いて下さったのをよく覚えています。

原体験 星の靈感

幼少の頃、私は家の2階の物干しに上がって周囲の景色を見渡すのが好きでした。特に秋の夕方に浅間、妙義、榛名、赤城を見るのが好きで、その雄大な自然に感銘を受けたものです。浅間の左肩のところに夕陽が落ちて行くとき金襴のような雲が輝く様子をうっとりとして見てみると、いつの間にか真っ暗になって星が輝いているのにハッと驚く。そして寒気を感じて家の中に入るという機会が多かった。今になって考えてみると、あれで群馬の靈氣を受けたなど、そういう気がしました。幼少の時の原体験というものは、「三つ子の魂百まで」という諺があるように、非常に大事なことである。可哀相に今の子供は、アパートやコンクリートの上で育つため、カエルや蝉を捕ったりする原体験がないのです。だから、自然や人間や動物との交流というものが非常に少ないのです。これは人間、あるいは地球に生を受けたものとして非常に不幸なことであり、これは、我々にとって21世紀の大きな問題であると思うのです。

私はこの様な経験を通して、夜、星を見てハッと天のメッセージを子供心に受けたように感じます。その際、恐怖心も受けますが、非常に靈的な「何か」を受けるのです。例えば、お釈迦様は、宵の明星で悟った。また、ドイツの哲学者のエマヌエル・カントは有名な言葉を残している。「返す返すも仰ぎ見るこの空の星」、あの星と、それから「私が内なる道徳律」、自分が生まれた時から育ちたまっている道徳律、これが「普遍である」ということをカントは言っています。お釈迦様もカントも星の靈氣に打たれたという感じを持っているのです。

自然に受けるというものを考えてみると、今から約150億年前にビッグバンが起り、宇宙が今のように拡大している。そして塵ができ、何千億という銀河が生まれて、その中に太陽系銀河があり、その中に地球という惑星がある。そして、その中に我々は生まれた。なぜ生まれたか。水があるからだ。水はどこから来たか。宇宙の塵の中にあるその水が地球に来て水を生んだのではないかとされています。そして海ができた。海ができていくうちに、太陽や紫外線とか、いろんなものの変化を享受しながら、そこに生命が誕生する。そしてその生命がアメーバから進化し、爬虫類になって、海の中から陸（おか）へ上がってきた。陸（おか）へ上がって、その一部が植物になり、あるいは動物になり、人間になったのです。この様な生命の誕生の過去を考えると、地球上の

すべてのものは仲間であると私は思うのです。

褐色の文明と緑の文明

昭和25年、朝鮮戦争が勃発した年、私は世界の情勢を視察するため世界を回ってみた。その時、飛行機でベトナム、タイ、インド、それからアラビア半島へ行き、イタリアを通り、パリへと入る。そこで思ったことは「アジアは褐色で欧米は緑だ」ということです。上空から見た6月のアジアは、瓦の黒い屋根に住む、黄色、あるいは褐色の人々が、緑の水田で田植えをしている。ところがアラビア半島へ入ると、白い壁が出てくる。さらにイタリアからヨーロッパへ入ると、芝生、そして小麦の世界である。つまり、いろんな色が混ざっているアジアは褐色であり、欧米は緑であるということです。

また「アジアは褐色で欧米は緑だ」と、そう言ったのには精神的な意味もある。アジアというものは物事を総合的に把握するのに対し、欧米は「私と君のどこが違う」と考える。それが仏教とキリスト教、あるいは回教との差に現れるのではないかと思うのです。

そのような観点から見ると、仏教思想は深いものであると私は感じるのです。「山川草木悉皆成仏」、という言葉がある様に、山も川もすべて仏様だとお釈迦様は教えている。この思想はキリスト教と非常に違うところです。キリスト教は砂漠の中で生まれた宗教のため非常に凄絶なものです。モーゼの『十戒』を読んでも分かるように、砂漠の中で生きていくということは大変なことであり、神と直結して契約し、生かしてもらおうという思想です。つまり人間は偉いが、動物は僕であり、人間に奉仕し、犠牲になるものであると考えている。なぜならば砂漠の中で生きていくためにはそれ以外にはない。

これに関することで私の中で強く印象に残っている話があります。以前、ミッテラン元仏大統領と昼食を食べながら話をした時に、「私の家は仏教を信仰しているが、私は別に仏教信者ではなく仏教的な人間である。私の祖母は、蚊を見つけると、殺さずに手に包んで窓の外へ放してやる。」そう言ったら、彼は何と言ったかという、「その蚊は外へ行ってほかの人を刺すでしょう」と言った。私は、一神教と多神教の差がそこにあるのだなと思いました。

宇宙、自然、人生も無限の過程

私は友人である梅原猛さんと思想哲学的な話を交わす際、私と彼の思想で一致しない点がある。それは人間が生まれ変わって又この世に戻るという考え方についてである。私は宇宙や全世界、あるいは昆虫や動物と我々は仲間であり、宇宙は偉大な摂理というか、目に見えない大きな法則で動いているということは認識できる。また、これだけの大きなバランスというものが維持されているということを見ると、そこに神の存在を信じる人もいる。私は、神を認識することはできる。しかし、神を信ずることはまだできない。なぜならば、私は奇蹟を信じることができないからです。ということは、ある特定の集団には入れない。キリスト教や仏教等の特定の集団には入れない。そ

れには奇蹟が大体随伴している。けども、仏教一般の摂理については非常に深い共鳴感を持っている。

なぜならば、今ビッグバンで地球は無限大に膨張している。ある意味においては、「イン・トランジット・トゥ・エタニティー」(無限へ進む一過程)である。無限大に行く過程に今我々はいる。DNAというものを見ると、私のDNAは両親からきている。それはお祖父さんお祖母さんから来ている。それはもっと上からまずうっときている。そうすると、全人類のDNAというものが私に入ってきている。それはまた子孫に無限大に続いてゆくわけです。宇宙がビッグバンで無限大に膨張し続けて「イン・トランジット・トゥ・エタニティー」であると同様に、私の生自体も「イン・トランジット・トゥ・エタニティー」である。これは仏教の思想に非常に近いです。無量法とかというでしょう。インド人があの中でずうっと思索したものの中には宇宙全体を考え、また天体の動きも考え、あるいは人間の生の短さも考えて、あのような思想になったのではないかと私は見ている。

そこまでは分かるわけだ。だから私が、梅原さんに言うには、今の哲学は、それはデカルトにしてもカントにしてもヘーゲルにしても大体が認識論で、ある部分を、人間の意識とか、そういうものを中心に認識論で出てきている。横の拡がりにはデカルトが示した。「ジュ・パンス・ドンク・ジュ・スウイー」(われ考えるゆえにわれ在り)という言葉があります。縦の連続を示したのはヘーゲルです。世界精神とか歴史を教えてくれた。その重囲(じゅうい)の中で近代哲学というものは生まれ、それがまた近代というものを形づくってきたけれども、それが今や限界にきた。つまり、近代精神とかいうのは理性とか知性だけを中心にして人間がそれで住んでいると思っている。その理性とか知性だけで人間生活があると思ったら、とんでもないのであって、感性の世界、情感の世界というものが人間生活を非常に支配している。言い換えれば、トータル・メンシュ、全人的人間像というものを最近では復活して出てきている。だから「近代の終焉」という意味で、浅薄な知性や理性の限界を示したのは共産主義の崩壊であります。

近代、共産ソ連の崩壊と資本主義の放蕩性

最近の資本主義にしても、それが爛熟しすぎ、ヘッジファンドのように、価格の変動をわざと引き起こし、それを投機の材料にして儲けるといふ、そういう邪まなところまで経済が来てしまっている。これはアダム・スミスや、あるいはキリスト教の新教のカルピンや、その人たちが作った節度のあるキリスト教、そういうものから離れ、そしてランパントな、カジノ経済に世界経済がなってきた。特にものすごい勢いで電子マネーというものが動き出してきている。一日に動いている貿易の量は300億ドルです。ところがそういう電子マネーで動くのは1兆ドルから4、5兆ドルぐらいのお金が主として投機で一度に動いているわけです。物の価格をヘッジするための先物例えばデリバティブなどは容認されるが、投機そのものを目的にするお金の大量運用は非道徳的である。これはもう人間の墮落を示す以外のなにものでもないのです。そういう意味で資本主義と

いうものは、この辺でもう1回反省をして、自律性、節度を取り戻さなければ続かない。共産主義を倒したまでは良かった。しかし、倒した結果、ほかにもう資本主義以外ないと、非常にアローガント(傲慢)になり、それでいい気になった。経済のアメリカニズムというのは、そういうものであり、アングロ・サクソニズムが大体そこに走る傾向がある。それが今グローバリズムの一性格になってきている。それに対してヨーロッパ及びアジアは、固有の哲学や文化価値をもっていかに制御していくか。これが次の時代の大きな課題になりつつある。そう私は見ているのであります。

神を信じる瞬間

まだいろいろ申し上げたいことがあります。つまり、私は神を認識することはできるが、まだ信じることはできない。しかし、神を信じるという形は、偉大な和尚さんなり牧師さんがいて、その人間的影響力で信仰に入るといことは十分あり得る。まだそのチャンスに私は恵まれていないのかもしれないが、そういうことがあるという謙虚さだけは持っていなければいけない。あるいは、釈迦とかキリストのような天才であれば、星を見ただけで直観的に宇宙を悟るといことがあり得るだろう。しかし、我々は凡人だからそこまでの力はない。“重病になって癌でもう死ぬ”という間際になって初めて、「ああ、神様、私は信じます。本当にそう思います。」という気持ちになるかもしれない。あるいは汚職で牢屋へ入って苦しい生活をしている時に、自分が前非を悔いて、「ああ、やはり神様、私は立ち直ります。」という心境になるのかもしれない。ただ、そういう経験が私にはまだない。だから、そういうことがあり得るといことの謙虚さだけはまだ持っているつもりである。

そういう過程で、これからの哲学というものについて私は梅原さんに、「ビッグバンからDNAまでを包含するだけの大思想を、貴方がつくってください。さもなければ21世紀は耐えられませんよ。」と言っている。

生命について2つの国際会議の提唱

私は1983年にのウィリアムズバーグ・サミットで「人間科学と生命の尊厳」の会議を行うことを提起した。というのは、今後安楽死が増え、試験官ベビーが生まれる。この研究を突き詰めていくと、自然の摂理を冒瀆するといところにとどり着く。そのために、その正しい方法論をG7の学者を集めて討議すること毎年交代で行い、その結果を世界中の大学や各研究所に配布する。この提案には集まった各国の首相や大統領も日本は経済という考えを持っていたため、突然私が“人間の生命尊厳”を言い出したので、驚き賛成してくれました。第1回世界会議は箱根で、天台宗の山田恵諦という座主が議長を勤めローマ法王庁や、回教の学者や、ノーベル科学者等も出席し開催されました。この会議は7年間、引き続き行われていました。

また、1987年のヴェネチア・サミットで、「ヒューマン・フロンティア・サイエンス・プログラム」といものを提起した。これには各国が賛成し、人間の脳や筋肉の機能に、どの程度までコ

ンピュータや人工的なインストルメントを使用して接近できるかという研究を世界的に行うことを試みた。日本は約35億円の資金を毎年、アメリカやヨーロッパも額は少ないが拠出し、世界的な委員会を作り共同研究を募集して研究をする。そしてその研究の成果を論文で世界に発表している。その中から今迄にノーベル賞受賞者が4人でています。今年東京及びブストラブルグで10周年のお祝いと記念行事を行いました。

ただし、人工的に生命体に近づくことには限界がある。私も最終的にそういったことは難しいと思っております。人間の部分は解明できても「心」はそうできるものではない。しかしそこへ前進していくというチャレンジ精神を人類が持つということは、科学の名前において許されると思うし、これは21世紀の人類の課題ではないだろうか。

考えてみると、人間の精神の深みという中には、無意識の世界というものが存在する。例えば座禅などは無意識の世界を探究しているわけであります。スイスのユングという心理学者は、仏教に非常に興味を持ちチベットへ行ってチベット仏教を相当深く研究して、無意識の世界、阿頼耶識（あらいやしき）の世界、そういう第八識、つまり、常識以外のもっと高度な意識の世界を分析した。その結果、科学的心理学というものを生み出したのです。河合隼雄君が『ユング心理学と仏教』という本を書いています。その本の中でユング心理学を極めていって仏教との間にどのような相関関係があるかということ。それを彼は論文にして、それをアメリカで講演して大変な反響を得ました。

政治と求道心

私は大学生のころ坐禅をやっておりました。「私は近いうちに戦争に行き死ぬことになる。どうせ死ぬのなら、平然と死にたいものだ。」と考え、坐禅を始めようと思ったのです。野狐禅であって本物の坐禅ではなかった。しかし、私は総理大臣の時に、全生庵という山岡鉄舟が作ったお寺へ、毎週日曜日の夜に行き1時間坐禅をしていました。後になって数えてみたら、5年間のあいだに270何回行っていました。ある時、坐禅をしていると最後の1時間経った時にお寺の和尚が鐘をチーンと叩く。その鐘を聞いた時に、私の体は五体が溶けて崩れた。そして自分の体はなくなり、ふつふつとして沸いてきたのは懺悔の気持ちであるという経験をした。それを2カ月ぐらい経ってから和尚さんにその話をしたら、それは1つの悟りであると言われました。しかし、禅の悟りというのは、そういうものが120幾つか重なって一人前になっていくものであると教わった。それを追求していく過程というもの、即ち坐り続けることが修行であり禅であると、私はそう思っています。

政治家もそのような気持ちを常に心に留め、求道心というものを忘れない。これが常に大事なことであり私は思っています。今、続々と若い政治家が出てきていますが、彼らには優秀な人も多いが、求道心がない。例えば吉田さん、池田さん、佐藤さん、あるいは大平さんとか、我々の時代には、安岡正篤先生という漢学の先生や、群馬県出身の関牧翁という和尚さんや、橋本凝胤という名僧の話。月に1、2回呼んで別々に話を聞いたものです。今の若い政治家でそういうことをやっている人はいないと思いますが、こういったことは日本の伝統だろうと思うのです。

求道心が欠落している原因は、戦後教育にあると思っています。50、60代の人々は、戦争で苦しんで、勤労働員で働かされ勉強をする時間がなかった。マッカーサーが占領しているあいだは教科書に黒い墨を塗って、これを読んではいけないというような偏頗な教育を受け、そして基礎学を欠いた。それから出て来た日教組の先生の教育で「君が代」も歌わない、国旗も揚げない、これでは国際社会に出て行ったら無国籍の流浪の民みたいなものであります。しかし現代の日本において、そのような教育を受けてきた人達が親や学校の先生にもなっている。そういう人は教える自信がない。その結果が今の教育と家庭の崩壊に表れている。

世紀末、3つのバブル崩壊 戦後政治の総決算

現在日本の最大の悩みは、政治、経済、社会の3つのバブルが崩壊したということであります。政治のバブル崩壊は、自民党が分裂し政党が幾つもできて政治の軸がなく、今のような漂流している政界になっていることである。経済では金融機関の崩壊があり、社会では教育の崩壊がある。最近、サリン事件や小中高学生が親や友だちを刺殺したとか、毒物混入事件、役人の汚職など忌まわしい事件が続々と毎日出てきています。こんなことは今までなかったことです。

私は今、政治のバブル、経済のバブル、社会のバブル、これらを「戦後政治の総決算」として整理し新しい秩序を作ることが必要であると思っています。新しい秩序を作るためには新しい価値体系が要る。新しい価値体系を作るには、学者や先生がしっかりしていることが不可欠である。彼らが基本的な理念を考えだし、それを我々が批判したりして自分の理念にして実行に移す。つまり、井戸を掘って水を供給してくれるのは彼らの役目であり、我々がその井戸の水を上手に活用するのです。そうすると社会に兆しが見えてくると思うのです。

20世紀の点検

そこで21世紀に向けて、最後の時期である1990年代という現代は非常に大事な時代なのであります。20世紀はどういう時代であったかということを考えると、人類の世紀の中でこんな悲惨な世紀は今までにないと私は言っているのです。2度の世界大戦、経済恐慌、民族独立運動、アフリカの部族闘争、スターリンや毛沢東の粛清、あるいはアウシュヴィッツで7,000万人以上の人々が非業の死を遂げている。1917年のポリシェヴィキ革命以来、89年にベルリンの壁が崩壊し、91年にソ連が崩壊した。この70数年間は非常に陰惨な時代を地球上は過ごした。片や共産主義、片や自由主義の対立が始まって、共産主義が祖国ソ連を守るためにコミンテルンを作り世界中に煽動勢力を派遣した。片やそれに負けてはいけないというので、警察力と治安維持法を強化して、自由と人権を抑えさせた。それから今度は原爆が生まれて“冷たい戦争”になり、人類は“ダモクレスの剣”の下に、いつこの剣の綱が切られて首へ飛んでくるかという慄きの中に生きてきた。そういう時代で更に、金融恐慌があり、自然破壊や公害が起り南北問題が深刻になったり、極めて悲惨な世紀であったわけです。

90年代になりようやく我々は“冷たい戦争”から解放された。今まで世界はアメリカとソ連の磁場のもとにマグネティック・パワーによって集められていた。しかし、“冷たい戦争”が終わり、磁場の電気が切れて鉄屑が散乱した。今世界は、散乱時代に入った。そうすると「自分は何だ」と、アイデンティティーを国家や民族や個人が探し始めたのであります。つまり、世界は“カオスの状態”にあるのです。

だから、私は新しい秩序を皆で作り上げなければならない時代に入ったと言っているのです。そういう中で考えさせられることは、1つはグローバリズムということです。情報網は進化し、インターネットによって世界中のあらゆる情報が瞬時に自分の手元に入ようになった。実は昨日、私の孫が結婚式を挙げまして、仲人はインターネットでした。インターネットの仲間が2、30人仲良くなり、それが名古屋で集まったり大阪で集まったりして、そのうちいい子をピックアップして嫁さんに決め、向こうは婿さんに決めたいのです。私は、生まれて初めて仲人のいない結婚式に出席しました。キリスト教の牧師さんが司会して指輪の交換と宣誓に立ち会いましたが、それ以外の宗教的儀式はありませんでした。しかし、これが21世紀の姿なのかもしれません。結婚式のやり方からなにか全部自分たちだけで決めた。私はそれを見ながら、非常に微笑ましく感じて、『ああ、日本の憲法にもいいところがあるな』と思いました。それは“結婚は両性の合意に基づいて行われる”と明記されているからです。

この高度情報化時代は益々進歩している。例えば、アメリカのイリジウム計画というのは地球を取り巻いて60個の衛星を上げて、どこからでも即座に電話が通じるというものであり、日本でも京セラがその中に入ってやっている。そういうような時代に入り悪くすると、アメリカの情報帝国主義が世界の情報を支配する。あるいは経済ではグローバリズムという自由化を強く唱え、インドネシアもタイも韓国もアメリカとIMF（国際通貨基金）の言うとおりにしたらインフレが起き、あのように政治が破壊されたような事態が起きた。これを見て、今近代主義の終焉を是正しようと、そして一番ひどい資本主義の爛熟期に投機による電子マネーの瞬時的移動やヘッジファンドを直そうとG7サミットでも決められたわけです。

言い換えれば近代主義というものの流れは、1つは資本主義であり、1つは共産主義であります。西部邁さんが言っているように資本主義というのは、近代主義の遊蕩児の要素があるわけです。今のような投機経済が出てきた。共産主義というものは、これは民主主義の鬼っ子です。片や遊蕩児、片や鬼っ子だ。この中でアフヘーベン（止揚）してどういうものを作り上げていくか。私は人間の自由や、競争心、また同時に調和力や慈悲心というものを考えていかなければならないと思うのです。

例えば発展途上国が世界競争に貿易で入ってくるという時には、競争である以上ルールは1つであります。野球や、柔道、テニスだってルールは1つだ。2つはないわけです。だから貿易でWTO（世界貿易機関）へ入る以上、ルールは1つだ。だけれども、強い者だけに勝手にやらせれば弱肉強食で弱い者は動けなくなってしまう。そこでゴルフでもハンデキャップというものがあるわけ

です。日本やアングロ・サクソンはハンデキャップ0（ゼロ）から5ぐらいにする。ところが韓国やインドネシアやタイはハンデキャップ20とか25でいい。そして腕前が上がるにつれてハンデを上げていく。そのハンデキャップ委員会の委員長に日本がなればいい。そうして世界の調和を図ってゆく。なぜなら我々は発展途上国から上昇し、途上国と先進国の双方の経験を持っているからです。

ハンチントンが「文明の衝突」ということを言いましたね。彼は儒教文明、回教文明、キリスト教文明、それに日本文明を挙げました。その4つの文明の中で中国とアラビア文明が協力し、西欧キリスト教文明と衝突するといっている。私はこれだけ情報が発達して、人権意識が高揚するようになってくれば、戦争をするバカはいないと思っている。例えば中国と台湾の関係を見ると『中国は台湾を武力に訴えてでも解放する』と言われていたが、李登輝氏がアメリカへ行ったというので中国は怒ってロケットを台湾海峡に発射した。その際、アメリカが「大変だ」というので航空母艦2隻をそこへ持っていったことがあった。その結果、台湾の株も中国の株も大暴落して大不況が来た。そこで彼らは教訓を得て、現状維持が一番いいんだと、うっかりくだらないことをやると生活が下がってしまう。そういうことでステータス・クオー（現状維持）をしていこうと考えた。

それには例えば日中友好平和条約や国際法、あるいはアメリカとの上海コミュニケであるとか、そういう約束は厳然と守っていかなければならない。そういうような原則のもとに日本とアメリカと中国が話し合う。少なくとも現状維持でいつか時間で解決する。一体中国がどの程度民主化されるか、経済がどうなるか、台湾の国内情勢がどのようになるか。これらの課題は次の若い世代に任せれば良いと私は思います。そのようなやり方で東アジアの平和を維持する。台湾にもそういうような節度を持たせる。今、中国も国家の建設が一番大事だから、そちらに重点を注ぐようにしてもらおう。そして日本、中国、アメリカのヘッドが定期協議をやるような機会をつくる。また外務大臣会議とか、防衛大臣会議とか、そういうものをつくる。そうすれば台湾も自制するし、中国も安心するのではないのでしょうか。それが次の日本外交の大きな目標であります。

それと同時に、「文明の衝突」という面から見れば、中国、韓国、日本、ベトナム、あるいはシンガポールも入るかもしれないが、これらの国は漢文明に影響を受けている世界です。これが仲良くしていき共産主義や自由主義を超えた文明のルーツというものを意識して、新しい共存の方法を探っていくという叡智が21世紀に出てきていいはずであります。資本主義とか共産主義なんていうのは、わずか200年ぐらい前に生まれた問題であって、片っ方は遊蕩児で、片っ方は鬼っ子です。もっと古い文明の根源に皆が遡り、人類の平和というものを考える。そういう東北アジアの文明圏というものを我々は次の段階に考える。その上に立って東アジア全体、A S E A N（東南アジア諸国連合）まで入れたものを考えていくことが必要である。

東アジア金融協議会の設立と経済圏の形成

特に最近の経済危機を見て感じることは、東アジアが無防備であったということです。東アジアのA S E A N（東南アジア諸国連合）を含め、さらに韓国、中国まで入れてアジア金融協議会とい

うものを作り、自分たちの弱点を克服する。システムの脆弱性を自ら直す。そして自ら予防措置を講ずる。情報交換をする。そういう形で外国からの、私はファイナンシャル・ウルフ（金融オオカミ）の襲撃に備える。そういう形でお互いがどうして安定されるか。その1つは、アメリカとのペッグ制を改めることであります。アメリカのドルと元が結びついている。日本は流動性を持っているからそうではないが中国やタイや韓国がそうであった。今、香港がそうです。タイや韓国はアメリカと結びついていたものだから為替が固定して外国の資産がどんどん入って、国内経済に非常な無理ができ、バブルが起こり、そこで外国資本にパーッと逃げられて、この間の大不況が出てきたわけです。そういう意味においてお互いがお互い協力し合う自主的なものをアメリカ、EU、IMFも入れて協議会を作っていく。これを自主的に行う。それが我々の次の道ではないかと思っています。

そういう積極性を持って、そこへ日本はアジア・マーシャル計画をやればいい。宮沢君が300億ドル出しているけれども、私は前から600億ドル出しなさいと大蔵省に言っていた。というのは、インドネシアでもタイでも、あるいは韓国でも外貨を持っておるのを、ドルだけ持っていると危ないよと。ドルは、来年の景気その他を見てもどうなるか分からんよと。外貨のバスケットの中に、ニワトリの卵も、アヒルの卵も入れ、またウズラの卵も入れておく。外国が持っている外貨というものには、ドルも円も元もユーロも入れる。そのようにして安定性を持たせていくようにやっていく。これが将来は東アジア経済圏というものが出来ていく素地を作る。今から東アジア経済圏を作ると言えば論議を呼びます。アジア金融協議会という形でスタートして、だんだんそのようにバスケット方式で増やして行って、そして我々がアジア・マーシャル計画をやることによって円をどんどん使ってもらうようにして、円がもっとコンビニアンス（便利）なお金になるようにすることが一番大事なのです。ドルは非常に便利だから使うのです。日本の大蔵省は規制が多過ぎる。これをドルぐらいに解除してやる。そうすれば自由に円が使われるようになり、将来はアジア経済圏の中に円というものがドルと並んで主力通貨になってくる。片方ではEUがユーロという通貨でドルに対抗するものをつくった。米大陸はドルが支配圏であります。東アジアにおいてある程度の長期計画を持って、そのようなスキームを持って21世紀に向かって前進していくというのが、我々の子供に対する遺産でなければならないと思っています。

東アジア安全保障共同体の形成

それと同時に、東アジアに安全保障の共同体を作るということが大事です。ヨーロッパのNATO（北大西洋条約機構）というものは軍事同盟でソ連に対抗するものであった。しかし、ソ連が崩壊して敵はなくなり、NATOは何をしているかといえば、ボスニア・ヘルツェゴビナに軍隊を出したり、その中の治安維持をやっている。また、アラブの回教圏で何が起こるか分からないというので、潜在的に睨みを利かせているわけです。NATOができたからユーロというものができた。安全保障の基礎がなければ通貨の統一はできない。アジアにおいてはどうか。アジアにおい

て通貨の統一、あるいは力強い共同体を作っていこうと思ったら、安全保障の基礎が無ければ駄目なのです。それは何でできるかという、日米安全保障条約が1つ、韓国とアメリカとの同盟条約が1つ、タイとアメリカとの同盟条約、アメリカとシンガポールの協定、アメリカとオーストラリアの同盟条約、アメリカを中心にしてスポーク状に同盟条約の動力線が太平洋に埋めてある。それがあるからAPEC（アジア太平洋経済協力会議）に電気が付くのであります。経済協力は電気が付いてくる。これを無視して我々がアジアの団結を考えても、それはできない。

安全保障条約というのは、そういう機能も持って、ある意味においては政治同盟です。NATO（北大西洋条約機構）が変わってきているように政府はこれを正式に解釈して、アジア太平洋に於ける戦争抑止と平和維持の機能を国民に訴うべきである。もちろん武力行使を目的にして自衛隊を外に出すという事は行わない。それは前と変わらない。しかし、そうでない以外のことについては、自衛隊を派遣して、展開している兵力を引き離すとか、あるいは病院船を派遣するとか、あるいは国連のやる経済封鎖の場合の臨検をやるとか、そういう武力行使を目的にしない以外のことについては認めるべきである。さもなければ国際社会の一員として日本は将来生きていけない。これらの仕事は軍事的機能というよりも域内の治安予防の警察的機能であって、戦争目的機能ではない。これが同盟条約の政治効果で政治同盟化というのです。そういうようなことを国民の皆さんに説明しながら日本の将来を築いていくべきであると思っています。

もっといろいろ申し上げたいことがあります、以上で私のご挨拶を終わりにして、あとご質問をいただきますから、遠慮なしにご質問してください。演説して一番大事なのは質問の時間で、私は、ハーバードやイエールやジョンズホプキンス大学等、アメリカの大学でほとんど講演していますが、後の3、40分の質問の時間というのが一番大事なので、それで大体聴いている人の学力程度が分かりますからね（笑）。皆さんもしっかり質問しておかないといけません。どうもありがとうございました。（拍手）

質 疑 応 答

学生 良いお話をありがとうございました。

先生が、アジアにおいて日本がトップになるとおっしゃいましたが、それに対して、どうして韓国、中国、インドネシア、タイ、台湾と一緒にトップをやっていくという案はできないのでしょうか。

中曽根 私は、トップになるということは一言も言ってないのです。そういう協議会を作り、それでみんなの共同防衛をする。そのためにはお互いが忠告し合ったり、直し合ったり、あるいは人を派遣し合ったり、アーリー・ウォーニング（早期警戒）をすれば良い。そういうことをするうちに、だんだん、だんだん成長していく。その中に事実上、実力を持っているのはドルと円であります。それから元がそれに追いつきつつある。そういう意味で、中国にも敬意を表して、ドルと円と元と、

それからヨーロッパのユーロ、こういうものを外貨のバスケットの中に入れて外貨準備として持ってもらう。そうすれば、ドル一辺倒から解放されて、アジアはアジアの自主性を次第に回復していく。それを考えてやっているわけです。600億ドルぐらいのアジア・マーシャル計画をやれば、円が使われてくる。アメリカが戦後ヨーロッパにマーシャル計画をやった。あれはみんなにドルを出したわけです。それでイギリスをどっかいえば追い落として、アメリカ経済というものがヨーロッパにも非常に大きな力を持った。あれはマーシャル計画のお陰です。アジアにおいてはそのような野心を持ってやるのではなく、東アジアが一体になって回復して、ヨーロッパやアメリカに負けないだけのものをだんだん作っていきたい。少なくとも日本は、そういうために、ある程度犠牲も背負うという意味で言ったわけです。

学生 もう1つなのですが、それに対して……、済みません、分かりません……（笑）

中曽根 それに対してアメリカは、やや批判的な面があるのです。なぜならば、ドルが後退しやしないかという心配があるからです。しかしながら今のような考えに基づいて、アメリカ、IMF、EUも入れて協議会を作れば、我々だけで勝手にやろうというものではないという疑いを晴らすことができるであろうし、そういう考えでやろうという意味です。

学生 安全保証体制についての質問ですが、日米安全保障条約を締結したままにしておく、パックス・アメリカーナという言葉に代表されるように安全保障体制におけるアメリカ主導型が残ると思うのですが、安全保障体制で新しい価値観を構築するとおっしゃられたのですが、新しい価値観とはどんなものなのでしょうか。

中曽根 ご質問の意味がよく分からないのですが、私が申し上げたのは、ヨーロッパでユーロという独立の通貨が来年の1月1日からできて、フランスや、マルクといった主要通貨でさえも、統一して通貨を作るわけです。日本やアジアはそこまではとてもいかない。しかし少なくとも、経済を安定させて外部から攪乱されないような共同防衛体系を作っていこうという意味で私が言っているので、むしろ防衛的です。しかもそれを作る際に必要不可欠な要素となってくるのは、安全保障の確立です。この地域に戦争は起きないという安心感がなければできない。ヨーロッパでは、NATO（北大西洋条約機構）がそれをやっている。アジアにはそういうものはまだない。そのかわりアメリカを中心にしてスポーク状に各国と同盟条約網ができています。日本の日米安全保障条約もそういう意味の機能を果たしている。つまり、紛争の予防、あるいは抑止力として紛争を起こさせない、そういう体系として力を持っている。換言すれば域内の治安の警備的機能を果たしている。これが太平洋に動力線となって埋没されている。それでAPECというアジアの機構に電気が点いてくる。そういうことまで我々は考えてやっていいんだと。これは私がもう3年前から言っていることですが、今の政府は、それに賛成しているような、賛成していないような、まだ曖昧な態度を取っています。もうこの辺で踏み切ったらどうだと小淵さんに言っている。彼は真空だというから、真空というのは吸収力多いですから、たまには私の言うことも聞いてもらったらいいと思っています。

学生 そこで、現在残っているアメリカのリーダーシップというものは、現状のまま残るのでしょ

うか。

中曽根 アメリカのリーダーシップは、私は、これから益々強くなるとは思っていません。しかし、安全保障の最後の決め手はアメリカが持っている。そしてそれ以外の日常のやることについては、アメリカは、各国の言うことを非常に聞くように謙虚に変わってくると思います。というのはこの間IMFが、インドネシアやタイや韓国で厳しい政策をとりました。そのために石油や米が暴騰したりして暴動が起きました。あれでアメリカ流のやり方というものがほかの国にそのまま適用できないということが分かったわけです。そういう意味において、まずはIMFのやり方を直さなければならぬ。各国の国情に応じてやるべきであるということが今世界的に分かってきた。これからの21世紀の世界政策も、文明の多発性、文明の多元性、そういうものに謙虚にやっていかなければ世界の人は言うことを聞かないようになると思います。アメリカ人にはそれを早く知ってほしいと思っているわけです。

学生 ありがとうございます。

学生 ヨーロッパに比べてアジアは、各国の経済状態とか政治状態が大変複雑ですが、その上で、先生の言われたことは、可能なのでしょうか。

中曽根 それは非常にいい質問で、アジアは、ヨーロッパほど単純ではない。第一に、ヨーロッパは大体キリスト教です。アジアには仏教もあり、儒教もあり、回教もあり、ヒンズー教もある。そういう訳で非常に宗教的基盤が違う。それから社会的基盤がまた非常に違います。ある国はまだ権威主義的国家体制であり、ある国は共産主義である。ある国は、台湾問題とかで両方がまだ対立しているという意味において非常に複雑です。ですから、そう簡単にはいかない。しかし、話の合う同志で先にどんどん進めていって、そして仲間を増やしていくというやり方が賢明だろうと思います。

学生 ありがとうございます。

学生 きょうは貴重なお話を聞かせていただきまして、誠にありがとうございます。2点ほど、きょうの講演には全然関係ないのですが、質問させていただきまして、よろしいでしょうか。

中曽根 どうぞ。

学生 1点目、地域分権についてなんですけれども、今の小渕政権のやり方、前の橋本政権のやり方等見てきまして、どうも小手先だけの政策でしか打ち出せないような政権に、これから先、20年30年という長い目を見た政策が打ち出せるような気が僕にはしないのです。これから先、地域というものを考えていく上で、どういうふうな大きな目を見た政策というものをこれからの政府は取っていかなければいけないのかというのをお聞かせいただきたいと思います。

2点目は、先生は、常々改憲についてお話されていると思うのですが、現行憲法のどのような点が今の時代にそぐわないのか、改憲するとするならば、どのような点について改正していくのがベターなのかということ、先生のお考えをお聞かせいただければ幸いです。よろしく願いいたします。

中曽根 小淵さんは非常に頑張っていると、僕は思っています。始めは人気がなく、田舎者ではないかと、そのような評判が非常に強かったのです。しかし徐々に自力が出た。さっき申し上げたように、彼は真空ですから、自分の考えはそう持つてはいない。そのかわり吸収力が非常に強く、良いと思ったものを決断する。そういうやり方を持っている。もう一つは、彼は竹下さんの弟子であったから、気配りが非常に上手なのです。自分は凡人だと前から言っているが、そういうことを言っているのは、1つの宣伝で、政治的タクティックなのです。なぜならば、彼は片っ端から電話をかけるので、かけられた方は「私を大事にしてくれている。」と思うわけです。歴代の総理大臣で電話魔は三木武夫さんでした。三木武夫さんに負けにくいぐらいの電話魔が小淵さんであると、私は思います。謙虚に話を聞く。だから非常に好感を持つ。そして“応援してやろう”というような気持ちを起こさせる。そういう気配りが徐々に効いてきた。そういう意味で、人気も徐々に回復しつつあるのです。

しかし、これからが本当の正念場である。それは何であるかという、今度の自由党と自民党の連立において保守だけでは弱い。というのは右バネが強過ぎる印象を与える。だからもう一つほしい。例えば写真を撮る時に写真の脚立は三脚で安定する。二脚では立てない。そこで政治基盤を安定させるためにもう一脚は何かといえば、私は公明党だと言っている。というのは、公明党が我々に政策が一番近いからです。民主党では菅さんが、個々の議員となら話をするが自民党とは政策の話はしないとやっている。そうなると話ができない。あとは共産党になるので、自民党は公明党と話をして連立内閣へ早く入ってもらう。あるいは連立しないにしても閣外協力をするとか、重要法案を通す時には了解してもらって、多少は修正しても賛成してもらうとか、そういうような方策で政局を安定させるということが、これからの大きな仕事だろうと思います。この間のアメリカの選挙で共和党がどうして負けたかという、一つは景気が非常によかったこと、もう一つはキングリッチというアメリカの下院議長の民主党が女性の問題でクリントンをいじめ過ぎた。3番目は景気が爛熟して貧富の差がつき過ぎた。これらが負けた原因です。

そこで大事な点は、さっき申し上げたアメリカとのガイドラインの問題でこれは1996年4月に橋本さんとクリントンが約束した共同声明がある。それを実行に移すということです。今まで実行していないので、これを小淵内閣で実行しないと、もう時間切れになってきている。これをやらなくてはいけない。共産党や民主党が賛成するかどうか。あるいは公明党が賛成するかどうか。自由党は賛成してくれる。だから公明党とよく話し合って、多少の点は直しても大筋でこれを成立させるということが、来年の4月の地方選挙を前にして小淵内閣がやる大事な仕事なのであります。

そういう点をうまくやり、来年度予算をこれから編成いたします。それから税制改正もやります。これらについては自由党とやることになっているが、できたら公明党ともよく話し合いをして、ある程度向こうの考えも呑み込んで入れるものは入れてあげる。そういう形で友好関係を結び、次の通常議事を何とか乗り切るといのが、これからの小淵さんの戦略であり公明党を非常に大事にするということを考えなければいけない。それが右バネを回避するという意味で大事なことでもある

と思います。

憲法の問題については、日本国憲法はマッカーサーが英語で持ってきたものを、日本語訳したものであるため日本語としても無理があり、また憲法で主権在民と謳われているにもかかわらず、マッカーサーから与えられた憲法をそのまま頂いているというのは主権在民ではない。主権在民の国民であるならば、独立したらマッカーサーの憲法をもう1回再点検して、良いところは残し、悪いところは直す。これが民主主義であり、主権在民である。「そのスタートラインに立とうではないか」そういうことで次の春の議会で、国会に憲法問題の調査の常任委員会を多分つくることになると思います。そこでどういう議論が出るか、どこを改正したらいいか、どこを守ったらいいか、そういう議論を国民の前で公開して皆に聞いてもらい、そして国民の判断を求める。そういったことを10年ぐらいかけて行うべきだと思っています。私としては前から首相公選を唱えています。それは県市町村の長は直接投票で選ばれるのですから、総理大臣も間接投票でなく国民投票で選ぶように変えたら良いと考えています。

学生 金融危機をどう乗り切りますか。

中曽根 金融の体系については、石井学長が専門家だから、そちらに訊いてもらったほうがよさそうだが、私の考えを申し上げると、この間の9月の議会はあまり成功ではない。というのは、あの議会で金融再生法案を起草したが、その内容はブリッジバンクをつくり、その後銀行を国有化し、銀行に国がお金を出してやるというものであったが、この内容の順序が逆だったのです。銀行に国がお金を先に出してやるという法案を先にして、ブリッジバンクは後で良いのです。だから長銀にしても、今朝の新聞に出ている日債銀にしても国有化するというので安定し、国がお金を出すことによって預金者も安心したわけです。長銀はある意味においては政治がいじり回して、時間を浪費したという非難があった、今日日債銀をパチッとやったということは非常にいいやり方で、今後もそういうやり方でやり、それで国有化すべきものは早く国有化して整理をする。そして不良債権を始末して、足りないところは国がお金を出してあげる。そういう金融の手術を早期に行い、銀行を淘汰し機能を回復させることが第一段階である。

しかし、それは銀行を整えるという意味であって、貸し渋りがそれほど解消しません。貸し渋りを解消して景気を良くするには、今やっている信用保証を国が出してあげる。つまり、中小企業金融公庫や国民金融公庫で国がどんどんお金を出してやる。そして銀行は早く整理をする。そういう二段構えで景気を回復するようにする。そして来年、税制改正法案が3、4月ごろに通れば、長いトンネル出口の向こうに景気回復の光が見え始めるという段階になるだろうと私は見えています。

学生 教育改革はどこが中心ですか。

中曽根 教育基本法の改正について私は賛成であり、先程申し上げたように、先生や親に自信がない、その原因は教育基本法にあります。これは昭和22年、大東亜戦争が終わり日本がアメリカの支配下にあるときにつくられたので、あの教育基本法を見ると、日本をある程度弱くしようという意図はなかったにしても、書いてあることは、民主主義とか、自由主義とか、平和主義とかというこ

とであって、民族の伝統とか、家庭とか、歴史とか、そういうものはほとんどない。また国家というものをどう考えるかという、そういう定義もないのです。この基本法はマッカーサーがそういう時に作ったものだから、韓国に持っていても適用できるし、ブラジルへ持っていても適用できる、蒸留水みたいな基本法なのです。日本人の基本法は、日本の味がした、日本の水の味がするものでなければ駄目です。そういう基本法をこれからいよいよ直す時がきたと思っています。

だいたい日教組は教育基本法に日本の伝統や歴史が書いてないから、「君が代」も歌わなかったし、国旗も揚げなかった。しかし日本に生まれた以上、また世界に日本が立っていく以上は、オリンピックでも見たように、日の丸が揚がれば、みんな手を叩くし、涙ぐむのです。そういう自然的共同体というものを大事にする憲法や基本法もなければいけないと思っています。教育基本法はその基本になるものであります。

学生 ありがとうございます。

本講演録は平成10年12月14日、中曽根康弘世界平和研究所会長・元内閣総理大臣が高崎経済大学で行った高崎経済大学地域政策学会主催の講演と質疑応答であります。

中曽根世界平和研究所会長には、ご講演を快くお引受け下さり、本講演録の掲載をはじめ、様々なご高配を賜りましたことに厚く御礼申し上げます。

(高崎経済大学地域政策学会前学会長 戸所 隆)